子どもの土粘土を用いた造形活動

谷 村　さ く ら
四條畷学園短期大学

Children's Molding Activity Using the soil clay

Sakura Tanimura
Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要　第 50 号　別刷
平成 29 年 12 月 25 日

研究報告

子どもの土粘土を用いた造形活動

谷村 さくら*

Children's Molding Activity Using the soil clay

Sakura Tanimura

粘土を用いた造形活動は、幼、保育園から小学校にいたる現場において、比較的よく行われている。粘土は、形を自由自在に変化する事が容易く、粘着性や自律性もある事から、子どもの造形活動に適した素材と言えるからであろう。ただ、粘土といっても様々な種類があり、保育、初等教育機関においては、小麦粘土、油粘土、紙粘土が主に使われている事が多い。柔らかさや保存方法の容易さによるものであると思われるが、本活動は、土粘土を用いて活動を進めた。土粘土は窯で焼成する事により固まり、「やきもの」として日常生活で使う事が出来る。自分で形づくった粘土の作品が、焼成することでその色や質感が変わる事を発見し、それを日常生活で使う楽しみを感じ、また、その後身近にあるやきもの作品に少なからず興味を持ってくれる事を期待した。

Key words: 子ども　幼児教育　土粘土　粘土遊び　造形活動　やきもの

1．はじめに

粘土といえば本来土粘土の事を指すが、他の油粘土や紙粘土と区別する為に土粘土と呼ぶ事が多い。その土粘土は自然の中にある、可塑性、粘り気のある土である。近年昔に比べ、外に出て遊んでいる子どもたちが減っているように思われるが、身の回りに自然が少なくなってきたり、外で安心して思いっきり遊べる場所が減少していることに加え、室内でのゲームの普及など子どもたちを取り巻く環境が変化してきた事が大きな理由だろう。そんな子どもたちが、自然から産出される粘土に触れ、握ったり、つまんだり、引っかいたり、もしくは踏みつけたりする事で、その柔らかさや冷たさ、さわり心地や重さを五感で感じることは子どものより意欲的な活動を導く事となる。

2. なぜ土粘土なのか

土粘土は、保育、初等教育機関において用いられる頻度は低い。取り扱いには少し注意が必要となるからであろう。乾燥しないように保存するのが難しく、保管する場所も確保しなければならない。重量があるので運ぶ労力も大きく、準備と後片づけに膨大な時間を要する。その上、焼成するとなると窯が必要である。窯は借りる事も出来るが大きな手間となる。このような理由から、紙粘土や油粘土、小麦粘土に比べ敬遠されがちなのである。

しかしその可塑性は他の粘土に比べ優れており、手の力が弱い子どもにとっても無理なく自由に表現できる素材である。その上、安価である為、大量に用意する事が出来、手や指先だけでなく、体全部を使った活動もできる。土粘土は乾くと石のように硬くなり、それを砕くとサラサラの砂のようになる。水分を与えれば柔らかくなり、水分量を増やせばドロドロになる。粘土遊びのみならず、石遊び、砂遊び、泥遊びも体験でき、その変化も楽しめる素材である。そして何より初めに記したように焼成する事によってやきものとして半永久的に形を残す事が出来る。

やきものは太古から私たちの生活に密着したものである。粘土と炎から器をつくりだし、食料を煮炊きし貯蔵する事が出来るようになり、さらにそこへ模様、装飾などの芸術性を発露させ、文化の発展を導いた。土粘土による造形活動は活動の

＊　四條畷学園短期大学　非常勤講師

みで終わることなく、子どもたちは焼成後の作品を手にした時に、柔らかかった粘土が硬い陶器となる事に驚き、毎日使っている茶碗やカップも粘土から出来ているのだと知ることとなる。つくる喜びの後に、どう焼き上がるのかドキドキしたり、使う喜びをも感じる事が出来るのは、土粘土の最大の魅力と言えるだろう。

3. 土粘土を用いた造形活動

ちぎる、丸める、のばす、ひねり出す、たたく、掘り出す、くっつける。子どもに土粘土を渡すと、個々に好きな活動を始める。さらに、ヘラや切り糸、麺棒やハンコなどの道具を使い出すとその活動はどんどん発展して行く。年齢によっては食べ物や動物をまねてつくる子も見られる。本活動でも、最初に粘土を触った子どもたちは、何も言わなくても好きな形に粘土を変形させて楽しんでいた。

土粘土を用いた活動は、このように好きに形をつくり出すだけでも十分であるが、本活動では基本的な、丸める、紐状にのばす、平らに伸ばす、といった活動から、ひっかく、押し付けると言った装飾を施し、最終的に焼成し器に仕上げることとした。

4. 活動内容と記録

参加者

3才～10才の子ども15名

用意するもの

〈指導者〉土粘土一人0.5kg、板、ガーゼ、麺棒、ヘラ、竹串、切り糸、霧吹き

〈子ども〉粘土に押し付けて模様をつけるもの

順序

土粘土がやきものになる課程を説明する

↓

粘土の感触を楽しむ

↓

決められた形にする

↓

積んだり、くっつけたりする

↓

麺棒を使って伸ばす

↓

模様をつける

↓

体の一部を使って、お皿の形にする。

1）粘土を触ってみよう

子どもの年齢を考え、粘土は一人0.5kgにした。これ以上多いと、器の形をつくる上で、子どもの小さな手には扱いが難しい。まずは好きに粘土を触って遊ぶ。切り糸を使って粘土を切ることに夢中になる子どもが多かった。年齢の低い子は、指で突っついたり、ヘラで線を書いたりしていたが、手の力が強い子はちぎったり、ひねり出したり、ヘラで切り刻んだり、個々に楽しむ様子が見られる。

指導者は、道具類の使い方をアドバイスする程度で、子どもの自主性に任せた。

2）おだんごのように丸めてみよう

丸めることは比較的簡単なようで、どの子も両手で挟んで転がしたり、机に置いて、片手で転がしたり。大きさも、小さいものから大きなものまで様々であった。丸めた団子は「誰がいちばん高くつめるかな」と声をかけ、何個積めるか挑戦したり、誰が一番高く積めるか競争したりした。兄弟で協力したりする姿も見られた。

3）へびさんのように細く長くしてみよう

紐状に伸ばす事は、丸めるより難しいようで、特に年齢の低い子は長いヘビをつくることが難しそうであった。器のつくり方に「ひもづくり」という技法があり、粘土を紐状に伸ばす事はその技法の基本でもある。ただ、技術的な事は全く指導せず、細く長くなっていく粘土の変化を楽しめるように声掛けをする。その後、紐状の粘土をぐるぐる巻いたり、ヘビも

みんなでつなげて、長い長いヘビにしたりした。

4）おせんべいのように伸ばしてみよう

手のひらを使って薄く伸ばしてみる。力の弱い子には初めはグーの手でバンバン叩くように声掛けをした。3才の子は力が足りずになかなか伸びなかったので指導者と一緒に伸ばした。あまり薄くても焼成後に割れやすい事、厚すぎても乾燥中に割れる可能性が高まることを鑑みて、およそ5～10mm程に伸ばすよう個々に指導した。

5）模様をつけてお皿にしよう

薄く伸ばした粘土に、持参したものを押し付けて模様をつけたり、ヘラで引っかいて模様を描いたりする。3才4才児には物を押し付けてハンコのように模様をつける方法が、力も不要でやりやすい。ひたすらヘラで突っついて穴をあける子や、指で模様をつける子もいた。

その後、自分の頭や膝などに乗せて形を沿わせる。そっと返して置くと、粘土は器の形を保つ。頭に載せること自体を楽しむ子が多く、保護者の頭を使う子や、友達の頭を借りる子もいた。深さを出したい子には膝を使う事をアドバイスした。粘土が髪や服にくっ付かないようにガーゼで挟んで形づけるとよい。失敗したり、気に入らなくて何回もやり直す子もいる。練ると元に戻るのは粘土という素材の一番の利点であろう。粘土が乾燥してパサパサになった子には少し水を掛けて練ることで、やわらかくする。その場合、水を用意して子どもに掛けさすと、水の掛かった粘土のヌルヌルやドロドロも体験できてよいと思うが、水分

を含みすぎると、柔らかくなりすぎて器の形に留まらないので、今回は指導者が行った。

6）乾燥、焼成

自然乾燥後、電気窯を用いて700℃で素焼きし、施釉後1230℃で焼成。この作業は後日全て指導者が行った。

7）焼き上がり、作品返却

およそ1か月後に子どもたちに焼き上がった作品を返却する。1か月という時間が空いた事や、色、質感が全く変わった事に驚く光景が多く見られた。焼成後は1～2割縮んでいる。

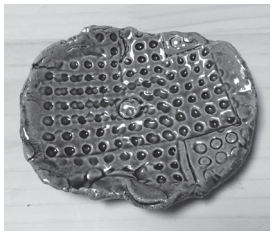
ただ、自分の施した装飾はよく覚えている子が多く、1か月前の活動を思い出して、焼成後の変化を喜ぶ姿も多く見られた。活動を見学していた保護者からの声として以下のような声も聞かれた。

○ずっと完成を心待ちにしていました。親は「まだ～？」「何で～？」の嵐から解放されます。

○とても楽しかったようで、嬉しそうに父親に報告していました。

○家でのスタンプ選びから、お皿づくりまで、親子で楽しむことができました。 娘（1歳）も体験させていただき、ありがとうございます。目を離した隙に、お団子粘土の味見をしており、まさに五感で楽しんでいました。

○みんなそれぞれ個性溢れる作品ができて、見ていて面白かったです。



5. おわりに

最初に、今回の活動の最終目標はやきものの作品に仕上げることであると伝えていたので、形づくってから焼き上がるまでの時間を、子どもたちは心待ちにしていた事が保護者からの声でわかった。しかし、最終的にやきものになる嬉しさにも増して、形ができるまでの様々な活動の方が子どもたちにとって楽しい時間であった事は明白であった。それは純粋に粘土の感触を楽しんだり、

ちぎったりくっつけたり、好きな形に変えられるという粘土の特徴が大きな原因であろう。ただ、小学生の児童になると、何に使うか考えて形づくる子も見られた。使う時の事をイメージしながら活動できるのは土粘土ならではと言える。低学年の子や、園児においても、今回やきものに仕上げた経験を踏まえて、また、土粘土を使った活動をするならば、今度は何をつくりたいとか、今度はこんな模様にしたいなど焼き上がりを考慮した活動が見られるかもしれないと感じた。土粘土を用いた活動は、その時の活動に留まらず、やきものとして仕上げる事で、様々な想像力を働かせ、予想し、形づくっていける活動に成り得ると強く感じた。

－ 2017. 10. 27 受稿、2017. 10. 30 受理 －